

# 人生は甲斐がなく無意味である ——水泡論証による擁護

笹 渥 介

## はじめに

本稿では人生の意味に関するニヒリズムを論証によって擁護を試みる。本稿で提示する論証を水泡論証と呼称する。人生の意味に関するニヒリズムとは、一言で言えば「人生には意味がない」という見解である。この見解を擁護する議論にはさまざまなタイプのものがある。例えば、デイヴィッド・ベネターは、宇宙的な観点から見れば、人生は重要ではなく、無意味であるという議論を展開している<sup>1</sup>。ベネターの議論の特徴は、人生の意味という概念を重要さに基づいて理解する点である<sup>2</sup>。これに対し、本稿で提示する水泡論証では、人生の意味を甲斐に基づいて理解する。すなわち、「人生には意味がない」という主張を「人生には甲斐がない」という意味で理解する。

本稿で提示する水泡論証はいくつかの着想に基づいているが、それらの着想自体は新しいものではない。例えば、水泡論証が依拠する前提の一つは、人間が不死ではないというものであるが、この前提に訴えて人生が無意味であることを論じる文献は古来数多く存在する。これまでの議論では、水泡論証の背景にある諸着想はさまざまに提示されてきたが、しかし、それらは断片的に述べられるにとどまり、一つの統一的なアーギュメントとして整理された上で提示されたことはなかった。そのため、これら複数の着想がどのように相互に関係しているのかは不明瞭であり、人生の無意味さを言い立てるこの種の議論が実際のところどのような議論として成立しているのか（または成立していないの

か)は明らかではなかった。こうした状況を踏まえ、本稿は、人生の意味に関するニヒリズムを導くあるタイプの理路を一つのアーギュメントとして再構成することによって、人生の意味に関するニヒリズムを擁護することを目的とする。

他方で、人間が不死ではないという前提に訴えて人生が無意味であることを主張する議論に対しては、批判も提出されている。イド・ランダウは、Landau (2017)において、とりわけ完璧主義的な考え方を標的にしながら、死およびそれによる消滅によって人生が無意味なものになるという見解を批判的に検討している。後述するように、本稿で提示する水泡論証は、われわれがいずれ死に、消滅するという前提に依拠しているため、ランダウによる批判に応答する必要がある。

本稿の構成について説明する。「人生には意味がある」という主張および「人生には意味がない」という主張は、さまざまな仕方で理解することが可能である。そしてこのことが、人生の意味をめぐる議論を(不必要に)錯綜させる一因でもある。そこで、まず第1節で人生の意味という概念を本稿がどのように理解するかについて説明する。また、第1節では他に議論の前提として必要になる事柄についても補足する。次に、第2節で水泡論証が依拠している根本的な着想について引用を用いながら肉付けを行い、続く第3節で実際に水泡論証を提示する。そして第4節では、それまでの議論を踏まえた上でランダウによる批判を検討する。最後に、第5節で結論を述べる。

## 1. 序論

人生の意味という研究主題についてスーザン・ウルフとサディアス・メッツらによって確立された枠組みはしばしばウルフ・メッツパラダイムと呼ばれる。このパラダイムの特徴の一つは、人生の意味について、meaning of life と meaning in life を区別した上で、後者に探究の焦点を合わせることである<sup>3</sup>。こ

の区別をどのように理解するかについてはいくつかの見解が存在するが、本稿では、前者を「人生がそもそも有意義でありうるかどうかを問題にする場合の人生の意味」、後者を「人生を有意義にするものが（仮に）何かあるとすれば、それは何であるかを問題にする場合の人生の意味」として理解する<sup>4</sup>。本稿が「人生には意味がない」と主張するとき問題になるのは前者の人生の意味、すなわち meaning of life である<sup>5</sup>。

ウルフーメッツパラダイムのもう一つの特徴は、人生の意味を道徳や福利 (well-being) とは異なる第三の価値として捉えることである<sup>6</sup>。本稿でもこれを踏襲するが、人生の意味を第三の価値として理解することの含意は、ある人生が全く無意味だったとしても、そのことは、その人生が道徳や福利といった観点から価値のあるものとなる可能性を排除するものではないということである<sup>7</sup>。この点で、本稿が主張する人生の意味に関するニヒリズムは、人生が端的に無価値であるという主張とは異なる。

冒頭で述べた通り、「人生には意味がある」および「人生には意味がない」という主張は、いくつかの仕方では理解することができる。これは一つには、「私の人生に意味はあるのだろうか？」や「あの人の人生には意味がなかったのだろうか？」というような人生の意味をめぐる種々の問いが、さまざまな文脈において問われ、またそのそれぞれの問いがそこで眼目としている事柄もさまざまであるという事情による。

「人生の意味」という言葉は、「意味」という言葉の多義性に応じて、複数の意味を持ちうる。例えば、鈴木 (2023) は、「人生の意味」は少なくとも次の三つの仕方では理解できると述べている<sup>8</sup>。すなわち、「人生に意味がある」という主張は、重要さに基づく理解によれば、「人生が重要である」という主張として、目的に基づく理解によれば、「人生に目的がある」という主張として、そして物語に基づく理解によれば、「人生が物語のようなものとして理解できる」という主張として理解することができる<sup>9</sup>。

また、鈴木 (2024) は、人生の意味をめぐる問いが多様であることを踏まえて、

人生の意味の問いを考えると、自分が「人生に意味があること」をどのように理解しているかを可能な限り明確にすべきであると主張する<sup>10</sup>。以上を踏まえて、本稿は、人生の意味を甲斐に基づいて理解する。すなわち、「人生には意味がある」という主張を「人生には甲斐がある」という意味で、そして「人生には意味がない」という主張を「人生には甲斐がない」という意味で理解する。

そこでまずは、「意味」という言葉自体に甲斐という意味があることを確認しておきたい。ここで、次のようなわれわれの日常的な言語実践を考える。

- (a) 毎日楽器の練習に励んだ結果、晴れてコンクールのメンバーに選ばれた。あの苦労には意味があったのだ。
- (b) 彼は生来の頑固者なので、医者が健康のためにタバコを止めるように言ったところで意味がない。

「甲斐」とは「行動の結果としてのききめ」（『広辞苑』第7版）のことであるが、上の二つの例においては、まさしく「意味」は「行動の結果としてのききめ」として、すなわち甲斐として理解されていると考えることができる。(a)においては、「結果としてコンクールのメンバーに選ばれたのだから、楽器の練習には効き目があった」ということが言われていると理解できる。また、(b)においては、「医者がタバコを止めるように言ったところで効き目がなく、タバコを止めさせるという結果をもたらすことはできない」ということが言われていると理解できる。したがって、甲斐は、「意味」という言葉の多義性を構成するものの一つであると言える<sup>11</sup>。

そして、「意味」という言葉に甲斐という意味があるだけでなく、本稿の主題である人生の意味を甲斐に基づいて理解することもまた可能である。例えば、弁護士になる夢を抱えた青年が、病気のため、弁護士になることなく志半ばでこの世を去ったとしよう。彼は弁護士になるため、自由に使える時間のほとんどを司法試験の勉強に捧げていた。こうした文脈において、「彼の人生に意味

はあったのだろうか」という問いを発することは自然なことであり、同時にこの問いで問題となっている人生の意味を甲斐に基づいて理解することもまた同様に自然である。つまり、弁護士になるという夢を叶えることに捧げられた彼の人生は、弁護士になれなかったという点でまさに「結果としてのききめ」を欠いており、その意味で甲斐がないものであったのかもしれないと考えることができる<sup>12</sup>。

さらに、人生の意味を甲斐に基づいて理解すると、例えば、人生の意味についての議論でしばしば持ち出されるシーシュポスの生が無意味であることをうまく説明することができる<sup>13</sup>。山頂から転がり落ちた岩を再び山頂へと運び直すことをひたすら繰り返すシーシュポスの生は、「結果としてのききめ」を欠いた行為を繰り返している点でまさしく甲斐のないものであり、その意味で無意味なものである。このように、人生が無意味である典型的なケースにおける無意味さをうまく説明できるという点で、甲斐に基づく理解は、人生の意味についての有力な理解の一つであると言うことができるだろう。

以下、本稿の議論を理解する上で注意しなければならない点をいくつか述べる。まず、ここまで述べてきたように、「人生には意味がある」という主張は「人生には甲斐がある」という意味で理解することができるが、ここで言われている「甲斐がある」とは、必ずしも、意図された結果を産出するという点で効き目がある、ということではないという点に注意が必要である<sup>14</sup>。

この点を示すために次のような状況を考える。あるサッカー少年がスポーツクラブの選手に選ばれるために、基礎体力づくりとして毎日早朝に走り込みをしたとする。結局、彼は選手に選ばれなかったのだが、このときの走り込みによって長距離走の魅力に気づき、それがきっかけとなつてのちに長距離走の選手として活躍することができた。この場合、所期の目標を達成することには寄与しなかったが、それでもたしかに彼の走り込みは、(少なくとも *prima facie* には) 甲斐のあるものであったと言うことができるだろう。このように、意図された結果ではなかったとしても、行為や活動が価値ある結果の実現へと寄与

したという点で「結果としてのききめ」があると言える場合には（少なくとも *prima facie* には）甲斐があると言うことができる。以上のことは、甲斐がないことについても同様に成り立つ。すなわち、ある行為や活動が意図された結果を達成できなかったとしても、直ちにそれが甲斐のないものであったということになるわけではない。行為や活動が甲斐のないものとなるのは、それがいかなる価値ある結果の実現にも寄与しなかった場合に限られる。

二点目は、本稿は、人生の意味について、甲斐に基づいた理解が唯一正しい理解であるということを標榜するものではないという点である。上で触れた通り、例えば、重要さに基づいて、「人生には意味がある」という主張を「人生は重要である」という意味で理解することも、そしてその上で、人生に意味があるかどうか、あるとしてどのような意味があるか——人生は重要であるかどうか、重要だとしてどのように重要であるか——を探究することももちろん可能であり、それ自体意義のあることである<sup>15</sup>。

最後に、本稿における「甲斐」には、例えば「やりがい」や「生きがい」という言葉がときに持つような、心的状態としての意味合いは持たされていないことに注意されたい。ある行為や活動に甲斐があるかないかは、本人がどのように感じるかということとは関係なく、それに「結果としてのききめ」があるかどうかによって客観的に決まるものである。

## 2. 根本的な着想

第2節では、本稿で提示する水泡論証が依拠している根本的な着想について肉付けを行う。なお、ここではあくまで着想の肉付けを行うにとどまり、それぞれの着想を根拠づける作業は、追って第3節で水泡論証を提示することを通して行うこととする。

まずは、トルストイの『懺悔』からいくつか引用しながら、論点を取り出すことにする。

人生は無意味なものである。——これが真理だった。[……]私は、自分の前に、滅亡のほか何物もないことを発見したのである。しかも、私は、[……] 自分の行く手に苦悩と真の死のほか、つまり、完全な絶滅のほか、何物もないという事実を見ずにすむよう、眼をおおうこともできなかった。(pp. 27-28)

この引用で、トルストイは、人生は無意味であると述べているが、その際、自分の人生の行く手に待っているのは「滅亡」や「完全な絶滅」以外の何物でもないという事実を持ち出している。このとき、「滅亡」や「完全な絶滅」は、死およびそれによる消滅という事態を指していると理解することができる。トルストイのように、自分がいずれ死に、それによって自分の存在が消滅してしまうということに思いを馳せたときに、自分の人生は無意味ではないかと考える人は決して少なくないと思われる。

それでは、死およびそれによる消滅はなぜ人生を無意味にすると考えられるのだろうか。この問いに対する一つの答えは、自分が人生でなすことが、自分の死およびそれによる消滅によって甲斐のないものになってしまうから、というものである。この点に関連して、トルストイは次のようにも述べている。

今日、でなければ明日、疾病が、死が、私の愛する人々の上へ、また私の上へ、襲いかかって来るであろう、[……] そして、腐敗の悪臭と蛆虫のほか、何物も残らなくなってしまうのだ。私の行為は、それがどのような行為であろうと、早晚忘れられてしまい、この私というものは、完全になくなってしまうのだ。(p. 31)

ここでは、自分の行為が早晚忘れられてしまうという事実が持ち出されている点が注目に値する。たしかに、先に引用したように、自分が死によって消滅することが運命づけられているならば、自分が人生でなしたこと (= 成果) のうち、自分にとっての価値を持っていることは、当の自分が消滅してしまうこ

とで価値を失い、無に帰してしまうかもしれない。その限りで、人生は甲斐がなく、無意味であるかもしれない。だが、自分の人生の成果のうち、他者にとつての価値を持っている成果であれば、自分が死んで消滅したからといって、直ちにその価値を失って無に帰してしまうわけではない。そのような成果が自分の死後も他の人々に記憶され続けるならば、自分がなしたことが無に帰することがなく、よって自分の人生は無意味なものにはならないかもしれない。しかし、自分の行為（の成果）が早晩忘れられてしまうのであれば、結局、他者にとつての価値を持っている成果も無に帰してしまうのではないか。トルストイの嘆きはこのような趣旨のものとして理解することができる。

ここで第3節での議論を先取りすると、トルストイのこれらの引用では、水泡論証に登場する一人称的成果と非一人称的成果が無に帰するという事態が問題になっていると考えることができる。詳しくは後述するが、一人称的成果とは、成果を生み出した本人にとつての価値（value-for）を持っている成果のことであり、非一人称的成果とは、成果を生み出した本人以外にとつての価値を持っている成果のことである。

なお、以上の二つの引用で見たように、トルストイは人生が無意味であることに絶望しているが、ここではトルストイの人生が重要でないことや、それが物語として魅力的でないことが問題になっているのではない。トルストイは、自分の人生が死および消滅によって甲斐のないものになってしまうことに苦悩し、またそれゆえに人生には意味がないと考えているのである。それゆえ、トルストイが問題にしているような人生の無意味さを適切に理解するには、本稿のように人生の意味を甲斐に基づいて理解する必要がある。

次に中島義道から引用する。

私の若いころも、日々というより刻々「どうせ死んでしまう！」という叫び声がぶんぶん頭の中でうなり声を上げていた。「死んだら二度と生き返らない！」という事実を恐ろしいほど鮮明に確認し、その残酷さに涙



も出てこない。[…] そして自分が死んでしまうかぎり、何をしても虚しいと思った<sup>16</sup>。

「自分が死んでしまうかぎり、何をしても虚しい」という嘆きは、「どうせ死んでしまうのであれば、人生において何をしてもそれには甲斐がない」ということの表現として理解することができる。先にトルストイの引用に際しても述べたように、ここでは当座のところ、死およびそれによる消滅によって、自分が人生でなしたことのうち自分にとっての価値を持っていることが、すなわち一人称的成果が無に帰してしまうことが案じられていると考えることができる。

また、中島は次のようにも述べている。

どんな社会が実現されようと、どんな教育が施されようと、各人がどんな積極的な生きる目的をもとうと、いずれすべての人は死んでしまい、いずれ宇宙から人類の成果はことごとく消滅してしまう。このことを誤魔化さずに直視すれば、人生が虚しいことは疑いえない<sup>17</sup>。

この引用で重要なのは、人生が空しいことを語る際に「いずれ宇宙から人類の成果はことごとく消滅してしまう」という事実が持ち出されている点である。トルストイの引用においては、自分の行為（の成果）が早晚忘れられるということが取り上げられていたが、中島のこの引用においては、人類の成果が消滅せずに宇宙に残るということが、死によって自分の存在が消滅することが運命づけられている人生がそれでも甲斐のないものとなることを回避するための一つの方途として捉えられている。このとき問題になっているのも先に述べた非一人称的成果である。

以上の引用を踏まえ、水泡論証が依拠する根本的な着想を改めて提示すると以下である。

私はいずれ死ぬことが確定しており、死んだら私の存在は消滅してしまう。よって、私がなしたことのうち、私にとって価値ある成果は消滅してしまう。また、私がなしたことのうち、他者にとって価値ある成果も、人類がいずれ絶滅してしまう以上は無へと帰してしまう。それならば、私が人生で何をやったとしてもそれは全部甲斐がないことではないか。人生は甲斐がなく、無意味ではないか。

以下では、水泡論証を提示することを通してこの着想を厳密にアーギュメントの形に再構成することを試みる。

### 3. 水泡論証

この節では実際に水泡論証を提示する。まず初めにアーギュメントの大枠を以下に示す。なお、この論証において「人」とはすべて不定の人を指す表現である。

- (1) 人の成果がすべて無に帰するならば、人生は甲斐がなく、無意味である
- (2) 人の成果はすべて無に帰する
- (3) 人生は甲斐がなく、無意味である ∴ (1) ~ (2)

これは、(1) ~ (2) から (3) を導出する論理的に妥当な推論になっている。よって、この論証の成否は (1) ~ (2) の前提の真偽による。以下ではこの二つの前提の真偽をそれぞれ確かめていく。

まず、(1) であるが、これまで説明した通り、本稿は「人生には意味がない」という主張を「人生には甲斐がない」という意味で理解する。人の成果がすべて無に帰するということは、人が人生で行うあらゆる行動の「結果としてのき

きめ」がないということであるから、ここから人生には甲斐がないということが帰結する。したがって、人の成果がすべて無に帰するならば、人生は甲斐がなく、無意味である。

次に前提 (2) であるが、これは次の論証によって示すことができる。

(2-1) 人の一人称的成果はすべて無に帰する

(2-2) 人の非一人称的成果はすべて無に帰する

(2-3) 人の一人称的成果がすべて無に帰し、かつ人の非一人称的成果がすべて無に帰するならば、人の成果はすべて無に帰する

(2-4) 人の成果はすべて無に帰する  $\because$  (2-1)  $\sim$  (2-3)

これも論理的に妥当な推論になっており、よって論証が成立していることを示すには (2-1)  $\sim$  (2-3) の命題が真であることを示す必要がある。

しかし、その前に、「一人称的成果」および「非一人称的成果」という言葉について説明が必要だろう。先に簡単に説明したが、一人称的成果とは、人の成果のうち、その成果を生み出した当人にとっての価値 (value-for) を持っている成果である。つまり、一人称的成果は、成果を生み出した当人にとって良い (good for)。これに対して、非一人称的成果とは、人の成果のうち、その成果を生み出した当人以外にとっての価値を持っている成果である。つまり、非一人称的成果は、成果を生み出した当人以外にとって良い。

この区別をより明確にするために、次のような状況を考える。明日香という少女が漢字検定を受験するために毎日朝早く学校に登校して始業までの時間に漢字の自習をし始めたとする。明日香のクラスメイトたちはそれまであまり勉強熱心ではなかったが、毎日真面目に勉学に励む明日香の姿に影響され、明日香と一緒に朝の自習を始め、そのおかげで明日香のクラスの成績が向上した。結果として明日香は漢字検定に合格したのだが、このとき、明日香の自習という行為が生み出した成果は一人称的成果と非一人称的成果に分けて考えること

ができる。すなわち、明日香が漢字検定に合格したことは、明日香にとって良いことであり、明日香にとっての価値を持っている成果である。よって、明日香が漢字検定に合格したことは、一人称的成果として理解することができる。他方で、明日香のクラスの成績が向上したことは、明日香のクラスにとって良いことであり、明日香のクラスにとっての価値を持っている成果である。よって、明日香のクラスの成績が向上したことは、非一人称的成果として理解することができる<sup>18</sup>。

このようにして人の成果のうち、一人称的成果と非一人称的成果を区別するのはには次のような理由がある。まず、成果が一人称的なものであるか非一人称的であるかによって、それが無に帰する理由が異なるため、事柄として分けて論じる必要がある。この次第については、(2-1) および (2-2) を論証によって示す過程を追うことで見てとることができるだろう。また、この区別を導入することには、(2-4) を示すためという論証構成上の（戦略的な）理由もある。(2-4) は「人の成果はすべて無に帰する」という命題であるが、これを直接的に示すのは困難である。そこで、人の成果が無に帰すということについて、一人称的成果と非一人称的成果とで場合分けを行うことによって間接的に (2-4) を示したいという狙いが背景にある。

これで一人称的成果および非一人称的成果が何であるかの説明が済んだので、次に (2-1) が真であることを以下の論証によって示す。

(2-1-1) 人はいずれ死ぬ

(2-1-2) 人がいずれ死ぬならば、人はいずれ消滅する

(2-1-3) 人はいずれ消滅する  $\therefore$  (2-1-1)  $\sim$  (2-1-2)

(2-1-4) 人がいずれ消滅するならば、人の一人称的成果はすべて無に帰する

(2-1-5) 人の一人称的成果はすべて無に帰する  $\therefore$  (2-1-3)  $\sim$  (2-1-4)

まず (2-1-1) であるが、これは人が不死ではないということである。これは

常識に基づいて真であると考えることができる。また、(2-1-2) は、人が不死ではないならば、人はいずれ消滅するということである<sup>19</sup>。人が不死でないということは、人がいつか死ぬということであるが、人は死によって消滅すると考えられるので、ここから人がいずれ消滅するということが帰結する。こちらについても同様に常識に基づいて真であると考えることができる。この二つの前提から (2-1-3) が論理的に妥当な形で導出される。

次に (2-1-4) が真であることを示す。先述した通り、一人称的成果が持っている価値は、その成果を生み出した本人にとっての価値である。「～にとっての価値」(value-for) は、「～」に代入される存在者と不可分の価値であり、「～」に代入される存在者 (今回は成果を生み出した本人) が消滅してしまうと、「～にとっての価値」(今回は成果を生み出した本人にとっての価値) は失われてしまう。この次第は、「～にとっての価値」についてレノウ＝ラスムセンが行っている FA 分析 (fitting attitude analysis) を見ることでさらに理解可能になるだろう<sup>20</sup>。

レノウ＝ラスムセンによる「～にとっての価値」についての FA 分析の概要を示すために、まずは終局的肯定的価値 (final positive value) についての FA 分析を見る。

終局的肯定的価値の FA 分析：ある対象 x の終局的価値は、x をそれ自身のゆえに (for its own sake) 支持する (favour) 規範的理由が存在することに存する<sup>21</sup>

このように、レノウ＝ラスムセンは、終局的肯定的価値という評価的概念を支持という態度と規範的理由という規範的概念の組によって還元的に説明する。なお、ここで「支持する」(favour) と「不支持する」(disfavour) は、さまざまな種類の価値ある対象によって求められる一連の肯定的反応・否定的反応を示すブレースホルダー (placeholder) として用いられている。

次に、レノウ＝ラスムセンによる「～にとっての価値」のFA分析を見る。

「～にとっての価値」のFA分析：ある対象xの人aにとっての価値は、xをaのために（for a's sake）支持する、または不支持する規範的理由が存在するということに存する<sup>22</sup>

このように、レノウ＝ラスムセンによれば、ある対象xの人aにとっての価値は、「xをaのために支持する・不支持する」という態度と規範的理由の組によって還元的に説明される。レノウ＝ラスムセンは、「～にとっての価値」のFA分析で登場する「誰かのために」という態度（‘for someone's sake’ attitude）をFSS態度（FSS attitudes）と呼称する。FSS態度は識別的（discerning）態度であり、それが向けられる対象が持っている性質のゆえに（on account of）その対象へと向けられる<sup>23</sup>。識別的態度の例は称賛であり、われわれはある人物aをaの性質N（例えば誠実さ）のゆえに称賛する<sup>24</sup>。

以上を踏まえて、一人称的成果が無に帰するという事態について改めて考えたい。一人称的成果とは、成果を生み出した本人にとっての価値を持っている成果であった。上のレノウ＝ラスムセンによる議論を踏まえれば、一人称的成果が「～にとっての価値」を持っているということは「xを当の成果を生み出した本人aのために支持する・不支持する」という態度を持つ規範的理由が存在するということである。しかし、成果を生み出した本人aが死によって消滅してしまったならば、もはや「xをaのために支持する・不支持する」という態度を持つことは不可能である。なぜなら、上で述べた通り、FSS態度はそれが向けられる対象が持っている性質のゆえにその対象へと向けられる態度であるが、肝心のFSS態度の対象であるaはすでに存在しないからである。そして、そのように不可能な態度を持つ規範的理由も存在しない。このようにして、成果を生み出した本人が死によって消滅すると、一人称的成果が持っている価値は失われる。これが、「一人称的成果が無に帰する」ということで表さ

れている事態である。したがって、(2-1-4) は真であるので、(2-1-1) ～ (2-1-4) により、(2-1-5)、すなわち (2-1) は真である。

次に、前提 (2-2) が真であることを示す。前提 (2-2) とは「人の非一人称的成果はすべて無に帰する」という前提であった。この前提は以下の論証によって示される。

(2-2-1) 人類はいずれ滅びる

(2-2-2) 人の非一人称的成果は宇宙全体にとっては取るに足らず、無視できる程度のものである

(2-2-3) 人類がいずれ滅び、かつ人の非一人称的成果は宇宙全体にとっては取るに足らず、無視できる程度のものであるならば、人の非一人称的成果はすべて無に帰する

(2-2-4) 人の非一人称的成果はすべて無に帰する  $\therefore$  (2-2-1) ～ (2-2-3)

(2-2-1) は常識に基づいて真であると考えることができる。人類が未来永劫にわたって絶滅することなく存在し続けるというのは信じ難い。(2-2-2) についても同様に常識に基づいて真であると考えることができる。周知の通り、宇宙全体はあまりにも広大である。われわれが影響を及ぼしうる範囲の宇宙は、宇宙全体のごく一部に過ぎない。人の非一人称的成果は宇宙全体から見ればあまりに取るに足らないものであり、無視できる程度の価値しか持っていない<sup>25</sup>。

説明が必要なのは (2-2-3) である。この前提が真であることは以下のような筋道をたどることで示することができる。ここで、人の非一人称的成果が無に帰さずに済むような条件について考えてみる。まずそれは、人類が未来永劫存続し、人の非一人称的成果を何らかの形で相続し続けることである。人類が存続する限り、自分が死んで消滅しても、自分の行為の非一人称的成果は他の人類に引き継がれうるため、無に帰するとは限らない。その場合、自分の非一人称

的成果は人類にとっての成果となる。人類にとっての成果は人類にとっての価値を持っている。

それでは人類がいずれ絶滅するとしたらどうだろうか。人類にとっての成果は人類にとっての価値を持っているが、人類にとっての価値は、上で一人称的成果がもっている価値について述べたのと同じ理屈で、人類が絶滅すると失われる。というのも、人類にとっての成果が人類にとっての価値を持っているということは、「xを人類のために支持する・不支持する」という態度を持つ規範的理由が存在するということであるが、人類が絶滅している以上、もはや「xを人類のために支持する・不支持する」という態度を持つことは不可能であり、そのように不可能な態度を持つ規範的理由も存在しないからである。よって、人類にとっての成果はすべて無に帰すことになる。

他方で、人類が絶滅するとしても、何らかの形で宇宙に非一人称的成果を残すことができるならば、人の非一人称的成果がすべて無に帰することにはならないかもしれない。その場合、自分の非一人称的成果は宇宙にとっての成果となり、それが持つ価値は宇宙にとっての価値となる<sup>26</sup>。しかし、人が生み出している非一人称的成果が宇宙全体にとっては取るに足らないものであり、無視できる程度の価値しか持っていないとしたら、結局、人類が絶滅し、人類にとっての成果が無に帰する以上は、人の非一人称的成果はすべて無に帰することになると言えるだろう。したがって、(2-2-3) が成り立つ。以上より、(2-2-1) ～ (2-2-3) は真であるので、(2-2-4)、すなわち (2-2) は真である。

次に検討するのは前提 (2-3) の真偽である。再掲すれば前提 (2-3) とは次のような命題だった。

(2-3) 人の一人称的成果がすべて無に帰し、かつ人の非一人称的成果がすべて無に帰するならば、人の成果はすべて無に帰する

振り返れば、人の一人称的成果とは、成果を生み出した当人にとっての価値を



持っている成果であり、非一人称的成果とは、成果を生み出した当人以外にとうての価値を持っている成果である。ある成果が何にとうての価値を持っている成果であるかは、成果を生み出した当人にとうての価値を持っている成果であるか、成果を生み出した当人以外にとうての価値を持っている成果であるかで尽きている。よって、一人称的成果と非一人称的成果の両者がすべて無に帰するのであれば、人の成果はすべて無に帰することになる。よって (2-3) は真である。したがって、(2-1) ～ (2-3) が真なので、(2-4)、すなわち前提 (2) は真である。

これで、前提の (1) と (2) が真であることが示された。以上より、(3) が導出され、人生の意味を甲斐に基づいて理解するとき、人生には意味がないということが示された<sup>27</sup>。

## 4. ランダウによる批判

ランダウは、Landau (2017) の第 5 章と第 6 章において、死およびそれによる消滅によって人生が無意味になるという見解を批判的に検討している。ランダウの批判の大要は、死および消滅は、たしかに人生の意味を縮減するが、人生を完全に無意味にするわけではないというものである<sup>28</sup>。ランダウの批判は多岐にわたるので、以下では一つずつ検討していくことにする。

まず取り上げるのが、「かつて価値あるものが存在したという事実は永遠に変わらないため、死および消滅が人生を完全に無意味にはしない」というランダウの主張である<sup>29</sup>。たしかに、かつて価値あるものが存在したという事実は、その価値あるものが消滅したとしても、事実としては永遠の地位を持っているというランダウの指摘自体は正しいかもしれない。しかし、ランダウは、価値あるものがかつて存在したという事実が永遠に変わらないというまさにそのことが、なぜ死および消滅が人生を完全に無意味にすることを防ぐのかということについてその理由を一切説明していない。価値あるものが存在したという事

実が永遠に存在するのだとしても、それはあくまで事実であって価値ではない。価値ではないものが永遠に存在することが、なぜ死および消滅が避けられない人生をそれでも有意義なものにするかという点については不明である。したがって、ランダウのこの批判は不十分なものであると言わざるを得ない。

次に、ランダウは、仮に上の議論を無視したとしても、物事は時間的 (temporal) だが同時に価値あるものであることが可能なので、有限な人生も十分な意味を持ちうると主張している<sup>30</sup>。しかし、われわれはまさしく、「物事が時間的 (temporal) だが同時に価値あるものであることが可能であるかどうか」について争っているのであり、ランダウは、この直観的に明らかではない主張について例をいくつか挙げるのみで、特にアーギュメントを与えていない。よって、こちらも批判としては不十分である。

また、ランダウは、愛する人々が死んだとき、われわれは故人の人生に思いを馳せ、それが有意義なものだったと思うことがあるということを批判の論拠として持ち出している<sup>31</sup>。しかし、これについても上の批判と同様に、死および消滅が人生を無意味にするかという問題のまさに論争的な点についての一部の人の直観を単に持ち出しているだけであり、やはり批判としては不十分である。

ランダウの一連の批判のうち、注目に値するのは、死は等化器 (equalizer) ではないということを論拠とした批判である<sup>32</sup>。ランダウは、「それらがみな死および消滅を控えているという点で束の間のものであるという理由で、すべての経験、人生が等しいものである」という見解の奇妙さを指摘する。例えば、キング牧師と切り裂きジャックについて、2人が死によって消滅しているという点で共通しているとしても、それゆえに2人の人生の価値が等しいと考えるのは奇妙である。ランダウによれば、こうした見解は、死および消滅によって人生が無意味になるという直観を別の形で表現したものである。ここで、ランダウは、死が等化器であるという見解の反直観性を援用することで、死および消滅が人生を無意味にするという考えがもっともらしい (reasonable) ものであ

るということを否定しようとしていると考えることができる。

しかし、この批判には以下のようにして応答することができる。まず、人生の意味という概念について、ランダウと本稿との間にすれ違いがあることが指摘できる。ランダウは、「人生に意味がある」ということを「人生に十分な価値がある」ということとして考えている<sup>33</sup>。ランダウによれば、有意味な人生とは十分な価値を持っている側面が十分な数存在する人生であり、無意味な人生とはそのような側面が十分な数存在しない人生である。これに対して、本稿では人生の意味を単なる十分な価値としてではなく、道徳や福利とは異なる第三の価値として理解している。そのため、先述した通り、本稿の議論においては、仮に人生が無意味だったとしても、そのことは人生が無価値であることを含意しない。よって、死および消滅が人生を無意味にするとしても、人生が無価値なものになるとは限らないので、死は人生の意味の等化器であるにしても、人生の価値の等化器ではない。

これに対し、人生の意味を第三の価値として理解したとしても、死が人生の意味の等化器であるという見解は依然として奇妙であると反論されるかもしれない。しかし、ここで本稿が提示する水泡論証が人生の意味を甲斐に基づいて理解していることを思い起こす必要がある。つまり、本稿の議論においては、キング牧師の人生と切り裂きジャックの人生は、ともに人生の意味を甲斐に基づいて理解した場合に等しく無意味であるのであり、他の仕方で——例えば重要性に基づいた仕方で——理解した場合に等しく無意味であるという主張にはコミットしていない。本稿がコミットしているのは、「人生の意味を甲斐に基づいて理解した場合、死は人生の意味の等化器である」という見解である。

これに対してさらに、「人生の意味を甲斐に基づいて理解した場合、死は人生の意味の等化器である」という見解も依然として奇妙であるという再反論が想定できるかもしれない。しかし、そもそも本稿は、人生には甲斐がなく、無意味であることを論証によって示しているので、単にその論証が依拠している着想（の一つ）——死および消滅が人生を無意味にする——が反直観的である

ことを言い立てるだけでは、本稿の議論への反論にはならない。一般に、論証を批判するのであれば、その論証が論証として成り立っていないことを、具体的にその論証のどの部分に瑕疵があるかを指摘する形で示さなければならない。以上より、死は等化器ではないという主張を論拠にしたランダウの批判は本稿の議論には当たらないと結論づけることができる。

最後に、ランダウは、死および消滅が人生を無意味にすることを示すために持ち出されるアナロジーやたとえ話を取り上げ、それらが当の見解を支持することに失敗していると批判する<sup>34</sup>。この点についてのランダウの批判は、たしかに Landau (2017) で取り上げられているアナロジーやたとえ話をういた議論に関しては妥当であるように思われる。しかし、本稿は、死および消滅が人生を無意味にするという見解を、アナロジーやたとえ話によってではなく論証によって擁護しているので、ランダウのこの批判は本稿の議論には当たらない。

## 5. 結論

本稿では、水泡論証を提示することによって、人生の意味を甲斐に基づいて理解したとき、人生には意味がないということを示した。本稿で積み残した課題は以下である。人生の意味に関するニヒリズムは、厳密には、「人生は必然的に無意味である」という主張として定式化することが望ましい。なぜなら、人生の意味に関するニヒリズムは、個々の人生の具体的な経過に応じて偶さかに人生が無意味になるということを主張するものではなく、それぞれの人生の具体的な経過とは独立に、人生は必然的に無意味であるということを主張するものだからである。しかし、今回はアークギュメントを論理的に妥当な推論の形で厳密に構成する必要上、人生の意味に関するニヒリズムを「人生には意味がない」という主張として定式化した。必然性という様相をアークギュメントの中に盛り込むためには様相論理を用いることが必要になるが、様相論理を用いたアークギュメントの厳密な構成については今後の課題としたい。

## 参考文献

- Benatar, David. 2017. *The human predicament: A candid guide to life's biggest questions*. Oxford University Press.
- Feldman, Fred. 2000. "The Termination Thesis." *Midwest Studies in Philosophy* 24 (1): 98-115.
- Landau, Iddo. 2017. *Finding Meaning in an Imperfect World*. Oxford University Press.
- Rønnow-Rasmussen, Toni. 2011. *Personal Value*. Oxford University Press.
- Trisel, Brooke Alan. 2002. "Futility and the meaning of life debate." *Sorites* 14: 70-84.
- Metz, Thaddeus. 2013. *Meaning in Life*. Oxford University Press.
- 伊集院利明. 2021. 『生の有意義性の哲学：第三の価値を追求する』. 晃洋書房.
- アルベール・カミュ. 1969. 『シーシュボスの神話』. 清水徹訳. 新潮文庫.
- 鈴木生郎. 2023. 「広大な宇宙のなかでちっぽけな人生に何の意味があるのか」. 森岡正博・蔵田伸雄編『人生の意味の哲学入門』. 53-78. 春秋社.
- 鈴木生郎. 2024. 「人生の意味と物語」. 『現代思想 2024 年 3 月号：特集＝人生の意味の哲学』. 38-49. 青土社.
- 中島義道. 2005. 『生きることも死ぬこともイヤな人のための本』. 日本経済新聞社.
- 古田徹也. 2023. 「人生の意味論と前期ウィトゲンシュタイン」. 森岡正博・蔵田伸雄編『人生の意味の哲学入門』. 209-237. 春秋社.
- 森岡正博. 2023. 「人生の意味の哲学はどのような議論をしているのか」. 森岡正博・蔵田伸雄編『人生の意味の哲学入門』. 33-52. 春秋社.
- レフ・トルストイ. 1935. 『懺悔』. 原久一郎訳. 岩波文庫.

## 註

- 1 Benatar (2017) Ch. 2
- 2 鈴木 (2023)
- 3 伊集院 (2021) p. 2
- 4 このような理解を採用するものとして古田 (2023)、森岡 (2023) を参照。メッツ自身は、Metz (2013) において、こうした理解とは異なり、meaning of life は全体論的 (holist) ないし宇宙的 (cosmic) であり、meaning in life は個人主義的 (individualist) であるという仕方で両者を区別している。つまり、メッツによれば、前者は宇宙や人類が意味を持っているかどうかに関心を持つものであり、それに対して、後者は 1 人の人間の生 (a life) が意味を持っているかどうかに関心を持つものである (p. 3)。
- 5 なお、以下で引用する文献の多くは、meaning in life について主題的に考察するものであるが、そこで述べられていることが meaning of life にも同様に当てはまることが明らかである場合には、その文献が meaning in life についてのものであることを特に断らずに引用を行う。
- 6 伊集院 (2021) pp. 12
- 7 これについてはもちろん逆も成り立つ。すなわち、人生が道徳や福利といった観点で無価値なものであったとしても、それが意味のあるものであれば、人生は端的に無価値なものにはならない。
- 8 鈴木 (2023) pp. 53-54
- 9 伊集院 (2021) は、このように meaning in life が他ならぬ「意味」であることを重視し、「意味」の語義や用法、それについての直観を主要な軸としながら考察を進めていく路線を「意味路線」と呼称している (p. 18)。本稿も、後述するように、「意味」に甲斐という意味があることに着目しながら meaning of life についての探究を行っていくので、同様のアプロー

チを採用していると言うことができる。

10 鈴木 (2024) p. 41

11 なお、このように、われわれの日常的な言語実践において「～には意味 (甲斐) がある (あった)」という発話が自然なものであるということは、そこで言及される行為や活動に実際にそこで発話されている通りの甲斐がある (あった) ということを保証しないという点に注意が必要である。つまり、所与の文脈において「～には意味 (甲斐) がある (あった)」という発話が自然なものであるということは、当の行為や活動に *prima facie* に意味 (甲斐) がある (あった) ということの意味しても、本当に意味 (甲斐) がある (あった) ということを保証するものではない。よって、そうした発話がわれわれの日常的な言語実践において自然になされるということは、本稿が主張するように、人が人生で行うことは (実は) すべて甲斐がないということと論理的に矛盾するものではない。

12 人生の意味についても注 11 と同様である。

13 カミュ (1969) 所収の「シーシュポスの神話」を参照。

14 この点で、甲斐に基づいた人生の意味の理解は、目的に基づいた人生の意味の理解とは異なる。つまり、自分の人生の目的 (例えば、難病の治療法の発明) を達成することができなかった場合、目的に基づいた理解によれば、その人生は無意味であることになるが、甲斐に基づいた理解によれば、たとえ当の目的を達成することができなかったとしても、他に価値ある結果をもたらすことができている (そしてその結果の価値が失われることがなければ)、その人生は甲斐がない (無意味な) ものとなるとは限らない。

15 もちろん、甲斐に基づいた理解において人生が無意味であるということが、例えば、人生が重要でないこと、すなわち、重要さに基づいた理解において人生が無意味であることを含意するという可能性は開かれているが、これについては本稿では検討しない。

- 16 中島 (2005) p. 13
- 17 Ibid. p. 9
- 18 もちろん、明日香が漢字検定に合格したことが明日香以外にとっても良いということはある。例えばそれは、明日香の勉強を見守っていた明日香の親にとっても良いことであるかもしれない。また逆に、明日香のクラスの成績が向上したことが明日香にとっても良いということもある。したがって、ある行為や活動の成果は、いかなる存在者にとっての価値に着目するかに応じて、一人称的成果として記述されることも非一人称的成果として記述されることもありうる。本文で、明日香が漢字検定に合格したことを一人称的成果として、明日香のクラスの成績が向上したことを非一人称的成果として記述したのは、便宜上のものである。しかし、このことは水泡論証の成否には影響を与えない。なぜならば、水泡論証においては、結局、一人称的成果も非一人称的成果もすべて無に帰するため、ある行為や活動の成果がどちらの成果として記述されるかということは論証の成否にとって relevant ではないからである。
- 19 この命題は、一見、死の哲学で問題となる終焉テーゼ (the termination thesis) と似ているが、それとは異なるものである。終焉テーゼは、人はまさに死の瞬間に消滅するという主張であり、これは消滅のタイミングを死の瞬間に限定している点で (2-1-2) よりも強い主張である。水泡論証のためにはこれほど強い見解を採用する必要はない。詳しくは Feldman (2000) を参照。
- 20 「～にとっての価値」についての FA 分析は Rønnow-Rasmussen (2011) の主題 (の一つ) と言ってもよいが、ここでは本稿の議論に必要な限りで取り上げることにする。
- 21 Ibid. p. 27
- 22 Ibid. p. 47
- 23 Ibid. p. 56



- 24 Ibid. Ch. 5
- 25 冒頭で言及したベネターもこの点について同様のことを論じている。  
Benatar (2017) を参照。
- 26 ここでの宇宙にとっての成果が持っている宇宙にとっての価値は、いわゆる端的な価値 (value, period) に相当すると考えることも可能である。
- 27 B. A. トリセルは、Trisel (2002) において、「人生は無益 (futile) である」という見解を批判的に検討している。トリセルによれば、無益であるということは、意図された結果を産出するための手段が、当の結果の産出に繰り返し失敗することである。無益さと甲斐のなさは次の二点において異なる。すなわち、無益さには反復の要素が含まれているが、甲斐のなさには含まれていない。つまり、一回だけの行為や活動についても有意味に甲斐のなさを語ることができる。二点目として、無益さにおいては、意図された結果が問題となっているのに対し、甲斐のなさにおいては、序論で述べた通り、結果が意図されたものであるかどうかはレレヴァント (relevant) ではない。このように、無益さと甲斐のなさは異なる概念であるから、トリセルの議論が仮にうまくいっているとしても、そこからは「人生には甲斐がある」ということは含意されない。
- 28 Landau (2017) p. 85
- 29 Ibid. pp. 85-86
- 30 Ibid. p. 86
- 31 Ibid. pp. 87-88
- 32 Ibid. pp. 86-87
- 33 Ibid. pp. 15-16
- 34 Ibid. pp. 88-92

